

週日の説教

金 大烈 神父 2008年11月11日(火)

《自分にできるよいことをしましょう》

今日は聖マルチノ司教の祝日です。

マルチノ司教はハンガリーの国境で生まれました。国境ですから、周りはフランスの境、ユーゴスラビアの境でもあり、いつも戦争があるところでした。父親は軍人でした。マルチノ司教は、子どものときから父親の姿を見て育ち、自分も軍人になる希望を持ち、青年になってから立派な軍人となりました。

あるとても寒い冬の夜、マルチノ司教は、何も着ていない物乞いが震えている姿を見て、自分の持っているマントを彼に被せます。そしてその夜夢を見ます。夢の中で、自分が物乞いに被せたマントを着ているイエス様に出会います。そしてイエス様は、「私を温めてくれて本当にありがとう。おまえは、私の気に入る者だ。」とおっしゃいます。

こういう有名な霊的な体験をします。

その後、全てを捨てて、ローマへ行きます。ローマへ行って、カトリック信者になる勉強をします。勉強が終わってから洗礼を受け、3年か4年の後、神学校に入り、叙階され司祭になります。そして司祭となってから、隠れて祈る生活をします。その間にローマ教皇から司教に任命されます。マルチノ司教は、殉教しないで、初めて聖人となった人物です。

今日の福音(ルカ 17・7-10)の中で、イエス様はこのようにおっしゃっていますね。『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです。』

マルチノ司教は、この表現のよう、完璧な謙遜の生活をした方です。

今日の福音の最後にある、『しなければならぬことをしただけです。』という言葉は、多分この世の中で人間が話す一番謙遜な言葉ではないかと思えます。よいことをしても立派なことをしても、「当たり前のことしただけです」という気持ちになれば、本当に心が豊かになると私は信じています。

今日の福音を通してもう一回考えてみましょう。単刀直入に申し上げます。この命が終わるまでの間に、**できる限り、自分に出来るよいことをなさってください。**自分によって助けられる人が多ければ多いほど成功したことになると思えます。死ぬまでの間に自分によって助けられた人が、数にならないほど少なければそれは悲しいことだと思えます。病気になっても、口がきけなくても、両手両足が動けない状態でも、私たちは必ず人の助けになることができます。何より素晴らしい祈りというものがあります。

「お金がたまって余裕が出来たら奉仕の生活をします」という人がいますが、その中で本当に奉仕の生活をする人を見たことはありません。自分自身もそれほど余裕はないのにも係わらず奉仕をしているのが、私たちの望ましい姿ではないかと思えます。

難しい状況の中でそれを何とかしながらも誰かのために助けになろうとする心が、「私たちのためにいけにえとしてご自分を捧げられた」イエス様の心なのだと思います。そして一番幸せになれる心でもあると思えます。そういう心を持ちながらあらためて頑張ろうとしなければなりません。

人生の中で、神様は必ず何回かの印を見せてくださいます。その印に気づくか気づかないかで私たちの人生は完全に変わると思えます。そういう意味で、私たちはいつも神様のことばに耳を傾けようとしなければなりません。

ある日、散歩をしながら、自分の足に踏まれた雑草を見て、人生の意味を考える。そういう心が私たちの中にあるならば、私たちは無駄に時間を捨てることはないと思えます。今の時間を通して、憎んでいる相手の顔を通して、必ずイエス様のみ旨は現れます。それを讀もうとする心が何よりも必

要ではないかと思えます。空気を読めなくてもいいのです。神様のみ旨を読もうとしてください。そちらのほうが自分の人生によいものになると思えます。

どのような事柄の中にも、自分を成長させる神様のみ旨が含まれていることを信じましょう。

ありがとうございました。